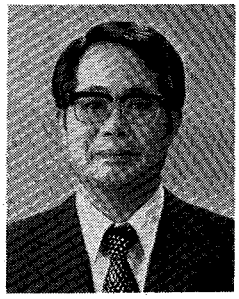
退官記念講演　　UDC 69.001



やわらかいものへの視点

My 40 Years in University of Tokyo

村　松　貞次郎*
Teijiro MURAMATSU

東大を停年退官するに当たっての感想を述べたもので，学生時代のことから始めて自分なりの研究史を概観し，その研究を通して日本の近代化の問題を考えた．とくに近代化の過程で必然的に物の生産のしかた，学問の構成，社会制度などが規格化，均質化してきたことを硬くなったと見て，これからの進歩の目標は，やわらかい視点の回復にあるべきだとした．

1. はじめに

「やわらかいものへの視点」，いささか突飛な演題であります．ことに何となく硬いものと思われがちな工学の，しかもその最先端にあって輝かしい業績をあげている東京大学生産技術研究所におきます退官記念講演の演題としては，あるいは不穏当な，とお叱りもあるかとも思います．しかし近ごろ私がしきりに思っておりますことを言葉にしますと，どうしてもこうなってしまうのです．

もちろん，こんなことを考えるようになりましたのは，やはり私なりの研究史の積み重ねの結果です．そこでまず，ささやかなものではありますが私なりの研究の歴史を紹介させていただきます．退屈な話で恐縮ですがどうかお聞き下さい．そうすれば少しは，やわらかいものへの視点として私の申し上げることの意味が，ご理解いただけるかと思うのです．

2. 学生時代

1) 梁山泊

私が旧制第八高等学校理科甲類を卒業して東京帝国大学第二工学部建築学科に入学したのは，昭和20年4月で戦争も末期的な状況にあったときです．勉強をするにはほとんど絶望的な条件ばかりでしたが，若いというのはよいもので今から想えばそれなりに楽しいヤンチャな想い出もたくさんあります．勤労動員はもう中学生のときからやってきたのですが，大学でもあったのにはいささか驚きました．終戦の直前まで群馬県の榛名山の麓の農村での農耕作業でした．あの辺りは古墳の多いところで，作業の休憩時間に緑の古墳の丘上で昼寝をしたりしてのんびりとやっていました．籔をかき分けて水浴に行った小川に鴛鴦（おしどり）のつがいが静かに泳いでいた姿は，今でも幻影のように思い出されます．それとグラマン艦載機に獲物のように追い廻されたこと．

終戦，しかし先生方は応召・疎開の先からなかなか帰ってこられず休講の日がずい分ありました．よくしたもので先輩がたが研究室にごろごろ（？）しておられたので（今のようなレジャーなどまったくなかったためでもありましょう），その先輩がたからいろいろの指導を受けたり，逆に議論を吹っかけたりして遊びかつ学ぶことができたのです．どういうわけかダンスも流行しまして，製図室の机を片づけてよくやりました．ワルツとか何とかステップの足形をガリ版印刷して実費頒布するチャッカリ屋もいましたが，彼はいま建築界の大家として澄ましております．学生同志の，いわば梁山泊でした．皮肉な意味でなくて，先生は適当にサボって，学生たちのグループ勉強と言うよりは若衆宿のような自己啓発力に任せるのもよいのではないか，と今でも確信しておりますが，それもこんな青春の日の体験によるところが大きいと思います．しかし，やがて私も先生になってしまいました．するとなかなかサボれないのです．サボらしてもらえないのです．そのため学生の出来も悪くなってしまった　…とまでは申しません．

昭和23年3月，どうやら東京大学第二工学部建築学科を卒業しました．どういう風の吹きまわしか建築の私が第二工学部総代として安田講堂で南原総長から卒業証書を頂いたのですが，その年の正月に学生結婚した私は，郷里から出てきた女房を案内してノンビリ銀杏並木を行ったのであやうく遅刻しそうになり，建築学科主任の渡辺要先生に気をもませてしまいました．その後，先生と飲むたびに冷やかされたものです．

2) 生産技術史へ

卒業と同時に私は大学院へ入学しました．指導教官は関野克先生と浜口隆一先生で，テーマは生産技術史の研

* 東京大学名誉教授　法政大学教授

究でした．このテーマは両先生と私の合作のようなもので私も関心を抱いていたものですが，後から思えばやはり乗せられてしまったようです．と申しますのは，御承知のように建築学科には建築史の講座は古くからありますが生産技術史というようなものはなかったのです．しかし背景が大きく変わり始めていたのです．終戦とともに日本の大学制度の大きな改革が始まったのですが，戦時中にできた第二工学部の改廃も問題になっていました．大勢は生産技術研究所への移行（もちろん犠牲の大きなものでしたが）の方向へ向っていました．関野先生はまだお若い助教授でしたが，その準備委員会の委員として精力的に活躍しておられましたので，御自分の担当されていた建築史の講座を新しい研究所の体制に合わせて生産技術史といった方向に転換すべきだとお考えになっておられたと思います．同時に先生は戦後間もなく再開された静岡市の登呂遺跡の発掘に建築史家として参加された経験をもとに，建築史学に技術史の観点を導入する必要を強く感じられ「登呂遺跡と建築史の反省」（『建築雑誌』昭和22年10月号）という学説史上きわめて重要な論文を発表しておられました．また浜口隆一講師も昭和22年9月，戦後間もない時期の建築思想史に画期的なものとされている『ヒューマニズムの建築』なる著書を公刊されました．技術進歩の上にバラ色の未来を描かれたものでしたが，根底にはやはり生産技術史への期待がこめられていたものです．そんな情況の中で，間もなく到来するであろう生産技術研究所時代への布石の一つとして私に白羽の矢が立っていたのでしょう．もちろんそれは，たんなる人事的な考慮ではなく，やはり学問の将来を見透された高邁な発想であったことは申すまでもないところです．その期待に十分お応えできたかどうか，こうお話ししておりましても冷や汗が出てくるほどです．

本人は気楽なもので，大学院学生時代をまったく自由に過ごしました．幸い戦時中にできました特別研究生制度が存続しておりまして，私の年度では建築構造学の富井政英君（現九大教授）と私の2名がそれに採用されましたので，同期卒の公務員とほぼ同じ月額の奨学金を貰って好きな勉強ができたのは幸いでした．この制度は理工系の研究者の卵を軍にとられまいとして文部省が始めたもので，戦争中の文部省の施策のうちで，唯一の世界に誇れるもの，と後に皮肉を言われたほどのものですが，毎年各学科卒業生で大学院に残る者の1〜2名に適用されていました．たしか建築学科の第1回の大学院特別研究生は丹下健三さんだったと聞いております．

3)　日本科学史学会

この大学院時代の私は，建築学会にはほとんど無縁でもっぱら日本科学史学会に顔を出し，岡邦雄・菅井準一・武谷三男・矢島裕利・古島敏雄・湯浅光朝先生たちのお尻にくっついて歩いておりました．その若い仲間には星野芳郎・山崎俊雄・飯田賢一・中山茂などの論客が多く，互いに技術論などをたたかわしたものです．鶴見事故で亡くなられた三枝博音先生には科学史学会を通じて，とくにお世話になりましたので，あの国鉄事故は今でも鮮明に脳裡にあります．先生の鎌倉アカデミヤにおけるお弟子の一人が製鉄史の飯田賢一東工大教授で，技術哲学の筋の通った学風は三枝先生ゆずりのものと言えます．

〝大学院時代こそ人生の黄金時代，こんな素晴しい時代はないよ．できるだけ視野を拡げて蓄積をはかれ〟という関野先生のお言葉を私は勝手に解釈して，満足な論文もほとんど書かずにおりましたが，科学史学会を通じての人的交流は，やはりその後有形・無形に大きな私の財産になりました．そんなことをしているなかで，昭和24年5月に生産技術研究所が発足しました．また同年1月に法隆寺金堂の火災があり，それを契機に翌年に「文化財保護法」が制定され，関野先生は文化財保護委員会の初代建造物課長を兼ねられることになりました．まさに〝余人をもって代え〟がたかったのでしょう．先生のお父さまの故・関野貞東大教授もお若いころ奈良県技師として日本で最初の文化財保存修理事業を指導されましたから父子二代の事業となったわけです．また浜口助教授はアメリカに留学されたり，建築評論の分野での活躍も目ざましく，そのため教室に出られることが少なくなりました．

そんなことで，いつの間にか大学院生の私が建築の教室会議や，所の編集委員会（本誌『生産研究』の編集・出版のためのもの）に代理で出席するようになりました．今から見ればとんでもないことですが，先生方も当然のような顔で相手にして下さったのは有り難いことでした．組織がまだやわらかかったためでしょう．

3.「明治の工学」

昭和28年3月，私は旧制大学院5年の課程を修了し工学部建築学科助手として藤島亥治郎教授・太田博太郎助教授の下で勤務することになりました．俸給を頂いての東大生活が始まったわけです．そうして今日，こうして記念講演をして退官するまで32年間，学生時代から数えると40年間，どこへも行かずずっと東大で過ごさせていただいたわけです．

大学院は修了しましたが，ついに学位論文はまとめることができませんでした．新制と違ってノンビリしていましたし，建築史関係は文学部などと同じ歩調で，学部卒10年以内では学位論文の提出は認めないという不文律というか慣行も昔からあったようです．もちろん私などはそれを逆用した気味がありますが，やはり取れる人は早くとったほうが何かと有利です．とくに工学関係の中にあっては，ということができます．新制度になって

もしばらくこの慣行は続いておりましたが，〝これ以上はもう馬鹿らしい〟というきわめて非学術的な口実で稲垣栄三教授と相談のうえで埒を勝手に取り払ったつもりでおります．とくに教職のポストへの就職にはたいへんな障害になっていたのです．もちろん論文の中身とは無縁のことですから誤解のないように．念のため．

本郷には約1年3カ月おりまして昭和29年7月に生研へ帰ってきました．本郷では当時まだ学生だった磯崎新さんや川上秀光（現都市工学科教授）さんたちと近代建築の研究会を続けたことがよい勉強になりました．

生研へ戻りまして最初にまとめた仕事が「明治の工学」で，これは開国百年記念会が刊行した『明治文化史』の第5巻学術編のうちの一章です．これは自然科学編を矢島祐利，人文科学編を野村兼太郎の両先生が編集委員としてとりまとめられたもので，昭和29年12月に刊行されましたが，私がまだ大学院学生のときからとりかかっていたものでした．工学はもちろん自然科学編の一部でしたが，この自然科学編の執筆者は矢島祐利(総記)，湯浅光朝（理学Ⅰ），篠遠喜人・古川晴男（理学Ⅱ），大鳥蘭三郎（医学），野口弥吉・古島敏雄（農学）というそうそうたる顔ぶれで，大学院学生などの出る幕ではもちろんなかったのですが，文化財のお仕事で忙しかった関野先生が私に一任されたものです．今から考えれば随分思い切ったことを，と驚くのですが，あるいは谷底へ突き落とされたのかも知れません．皆目見当もつかず盲滅法に工学会や工学関係の学会事務局および会誌などに当たって資料を集めたのです．そして，まったく私なりの明治時代の工学の歴史的体系とその発展のアウトラインをつくることができました．盲蛇におじずというのはこういうことを言うのでしょうか．広く浅くでしたが，この仕事はその後の私の仕事，とくに近代日本の建築の技術史的発展の研究に大きく役立ちました．建築が時代の思想とそして科学技術の成果の上に成り立っている以上，当然のことかも知れません．まことにタイミングのよいまたとない勉強の機会でした．

他の執筆者の先生がたも，大部分の方は科学史学会でお目にかかり，何かと御指導を頂いていた先生ばかりだったのも幸いでした．矢島先生からはこうした著書の文体にまで厳しい作法を教えていただいたのもよい勉強になりました．こうして多くの方がたのお力添えの中から私は研究者としてのスタートを始めたのです．今になって見ますと30年余の研究成果も，まことに貧弱で慙愧に堪えないところですが，大きく五つの分野にまとめて私なりの研究史を紹介申し上げ，そして今日考えていることお話しすることに致します．

4．明治の建築

1）遅れていた研究

日本近代建築の技術史的研究は，大学院時代の生産技術史の応用でもありました．すでに申し上げましたように明治の工学史の仕事が直接的にもたいへん役立ちました．長崎のグラバー邸の建立年代を何とか確定したいということで関野先生のお伴をしてその屋根裏に何日ももぐって調査をしていたとき，昼の散歩ですぐ近くの小菅ドック捲き上げ機小屋を建築史的に発見したことも，富岡製糸所の，やはり建築史上の価値を確認しえたことも，そしてその設計者のバスチャンを，幕末に着工された横須賀製鉄所と結びつけることのできたのも，建築以外の分野に広く視野を拡大した大学院時代の学習の成果が，思いがけないところであらわれたものと言えます．琴線に触れるということでしょうか，歴史の研究というものには，とんでもなく独立しているような事実が，あるとき急に結び付くというようなことがあります．菊と刀ではなく，軍艦と生糸というのでしょうか，横須賀製鉄所と官営富岡製糸所とが，フランス人技術者を通じて密接につながっていたことを実証しえたのはその例だと思います．こういうことがしばしばありました．

もともと幕末・明治以降の日本建築史の研究は本格的には第二次大戦後の，しかも昭和30年代半ばころから始まったものです．戦前にも先駆的な研究がごく僅かですがありましたが，あまり注目されていませんでした．もちろん日本近代建築史の通史もできていなかったのです．その通史がまとめられたのは，戦後間もなくのころ関野克先生がある世界美術全集の一巻として執筆されたものが最初だったと記憶しております．もちろん今から見ればごく簡単なものでしたが，大筋は見事に通っていて私たちがその研究の足がかりにさせていただいたものです．

日本近代建築史の研究が思いのほか遅れていた原因の一つに，大正の末から興ってきた近代主義建築の考え方というか思想がありました．戦前ではまだ少数派のものだったその思想は，第二次大戦後には支配的なものになりました．合理主義・機能主義・国際主義の考え方がその根底にあり，日本の近代建築，とくに煉瓦や石で建てられ，古い様式の衣をまとった明治時代の建築など，先祖の古証文のように恥ずかしいもの，早く消えて欲しいものといった見方をされておりました．かの梁山泊の先輩の一人から，私は，どうしてお前そんなみっともないものの歴史をやるのかと言われたことを今でも覚えております．

しかし私にはどうもそう思えないのです．科学技術史や明治の工学史を勉強してきた私は，日本の近代建築の出発は，やはり幕末・明治初期に本格的に西欧の建築文明と接触を開始し，その建築技術の導入と，レンガやセメント，あるいは鉄やガラスといった材料・構法の展開の時点に設定すべきであって，大正半ばころからの近代

主義建築思想の展開をもって出発点とすることには強い抵抗感がありました．たとえその形やデザインが古めかしくても，やはりその過程を抜きにしては日本の近代建築史を語ることはできないと考えていたからです．

幸い戦中・戦後の空白期が終わって欧米から近代建築史に関する著書も輸入されるようになりましたが，ギーデイオン，ペブスナー，ニコラウスらの史観が申し合わせたように近代建築の開始を産業革命の時点にまでさかのぼらせていたことは私を大いに力づけてくれました．

2）　和小屋と洋小屋

日本の近代建築，とくに最初にとりくんだ明治時代の建築（これを私たちは明治建築と略称しております）の現存するものの調査を始めた最初の段階から，私は不思議な現象に気付きました．グラバー邸の屋根裏にもぐったときが最初でしたが，いわゆる西洋館ではあるが，天井を張って見えない小屋裏には日本の伝統の小屋組（和小屋）の手法を用いるものがあったのです．グラバー邸もそうでした．また外観も西洋館で，小屋組もトラスを応用した西洋式の小屋組（洋小屋）というものもあるのです．

いわゆる西洋館を見るたびに私は必ずその天井裏にもぐって小屋組を見ました．若かったので今よりははるかにスマートで体力もあったのです．現存しないものでも写真や図面で判明するものはすべてその小屋組の資料を集めたのです．すると，西洋館にも和小屋と洋小屋をとる二つのグループがあることがはっきりしてきました．

それがなぜかが，なかなか判らなかったのです．私なりにずいぶん悩みましたが，神様が夢枕に立ったように，ふとしたことから解釈ができるようになったのです．判ってみればコロンブスの卵で，和小屋をとるものはほとんど日本の民間の大工棟梁が設計し建てたものでした．反対に洋小屋をとるものは幕府や幕末の雄藩，そして明治政府などの，いわばお上（かみ）の系列に属するものでした．同じ西洋の建築文明を迎えて，日本ではお上と民（たみ）とではその対応がまったく違っていたのです．詳しい説明は略させていただきますが，西洋文明をお上は技術として捉え，民間は様式として捉えていたのです．

考えてみれば黒船の衝撃で国を開いた日本です．その黒船に象徴されている西欧の文明の実質，すなわち科学技術を一日も早く我がものにしたい．追いつけ追い越せで近代化を図ってきたのも当然でしょう．富国強兵・殖産興業です．建築においても，その色や形は二の次で，まず技術を，と考えたのがトラスの小屋組の採用に具現していたのです．それに引きかえ，民間の棟梁たちは，木造の西洋館を建てる技術などは朝飯前だったのです．むしろ形や色の面白さに惹かれたのです．が，やがて滅んでしまいました．新しい文明に対応するこうした二面性は，あるいは日本人の特性かも知れません．そして和魂洋才のお上の系譜が支配して，ついに今日までの近代化をなしとげてしまったのです．

この二つの系列の存在，その意味が解ければ後は一瀉千里でした．私なりの近代建築史の体系をつくり上げるのにそう苦労はありませんでした．昭和36年9月「日本建築近代化過程の技術史的研究」で私は学位を頂きました．

3）　東大建築の「古事記」

学位を頂いた直前に私は助手から助教授に昇任致しましたが，助手としてはずいぶん怠け者でした．当時駒場にお住まいの関野先生が西千葉の生研に出勤される時間より，生研から歩いても十分余のところに住んでいる私のほうが，いつも遅いのですから話になりません．慙愧の至りです．しかし毎日のように先生のお昼の食事の準備をしました．と申しても近くのパン屋が自転車に積んでくるアンパンと牛乳を二人前買って，そのまま紙袋を破って召し上がっていただくだけのものですが，食事をされながら先生の話して下さる昔話がたいしたものでした．先にも申しましたように先生のお父様の関野貞博士は，明治28年の東大の御卒業で，日本および東洋建築史研究の碩学で，永く東大の教授をしておられました．その家系とお仕事の関係で，お子さんの克先生は東大建築学科の古い先生方の消息や学問業績についてたいへん詳しく知っておられたのです．アンパンを召し上がりながら，先生はまさに東大建築の古事記の語り部でした．それはまた日本近代建築の古事記と申してもよいでしょう．これがどんなに私の近代建築史研究に役立ったか，はかり知れないものがあります．まことにやわらかく，しかもぜいたくな勉強でした．

5.　日本近代建築調査

1）　明治建築の調査と研究

私が学位論文をまとめていたころ，ちょうど昭和30年代の半ばころから，ようやく日本近代建築史の研究もさかんになってまいりました．全国の大学の建築史研究者や地方自治体の有志などが日本建築学会を中心にして，現存する明治建築の調査を開始したのは昭和37年でした．初めはそれほど意識しておりませんでしたが，時代はまさに高度成長期に入ったころで，目ぼしい明治建築が続々と壊されておりました．この調査委員会は関野先生が主査として始められたものですが，間もなく私に代わり，約8年をかけて昭和45年1月の『建築雑誌』に全国約1,200件の明治洋風建築リストを発表することができました．

これはほとんど悉皆調査による苦しい作業でしたが，多くの成果をあげることができました．明治の建築に対する国民的な関心をたかめることができたのが第一の成果でしょう．昭和40年には博物館明治村ができて，意外

なほどの反響を呼んだのもその具体的な現れですし，国の重要文化財の指定も，明治建築の分野で急激に増えてきました．私にとって何よりもうれしかったのは，この調査を通じて全国に，若い近代建築史研究者がたくさん生まれたことです．苦しい調査の中から，それぞれのテーマを発見して，互いに全国的な連絡をとりながら研究者として育ってきたのです．

2）『日本近代建築総覧』

明治建築の全国調査を続けていた研究者たちが共通して認めたことは，当面の対象としていた明治時代の建築以上に，次の大正・昭和戦前の建築がはげしい破壊にさらされていることでした．当然にそれへの関心もたかまり，明治建築だけでなく，大正・昭和戦前までの，すなわち日本近代建築の主要なものの全国的調査の必要性が痛感されるようになりました．とくに明治建築の研究者たちの次に育った若い研究者たちが熱心に参加するようになり，日本建築学会を中心に昭和49年から調査が本格的に始められました．私は再びその主査として采配を振う立場になりました．朝日新聞社，続いてトヨタ財団が援助して下さったことは大きな力になりました．委員の全国分布や人数はさらに拡大し，韓国・台湾にもおよびました．調査は全国の町の路地一本も見逃さぬという徹底した現地主義で，足と目による調査で，それはまた研究室の街頭への展開でした．私は故人の陶工河井寛次郎さんの言葉〝手考足思〟をモットーに若者たちに協力してもらいました．私の研究室の藤森照信講師や堀勇良氏らが，まことに有能な幹事役を果たしてくれました．おかげで生研の私たちの研究室は，日本近代建築史研究のセンターの観を呈するようになりました．

調査結果は約6年後の昭和55年3月に『日本近代建築総覧』（日本建築学会編・技報堂出版）として公刊されました．日本統治中の韓国・台湾を含めて約12,000件がリストアップされました．さきの明治建築リストの10倍の件数です．

この出版にはトヨタ財団の研究助成成果発表助成金を頂きましたが，同財団はその設立5周年記念事業として私どもと共催の形で「街と建物――明治・大正・昭和」というテーマの全国巡回報告会を実施して下さいました．もちろん経費はすべて財団支出で，昭和55年内に名古屋を皮切りに全国主要10都市で，その地域の近代建築の実情を報告し併せてシンポジウムを開催したのです．最後に東京で国際シンポジウムを行いました．この巡回報告会は，広く市民に公開して行われたもので，近代建築に対する市民の理解と関心を深め，町並みの景観の保存・保護にも多少は貢献するところがあったと自負しております．私を代表者とする私たちの研究会は「日本近代建築の評価に基づく一連の都市計画上の業績」により，昭和58年度の日本建築学会賞（第3部業績部門）を受けました．

さきの『日本近代建築総覧』が刊行され，トヨタ財団と共催の国際シンポジウムが終了した時点で，私は建築学会における近代建築調査関係の小委員会の主査を下り，千葉大学の坂本勝比古教授に代わっていただきました．思えば20年以上も，当世風に申せばこのテーマにこだわっていたことになります．

3）近代和風建築へ

そして今〝こだわっている〟テーマの一つは，近代和風建築の調査と研究です．この近代和風建築と申しますものは，幕末・明治以降今日まで日本の大工棟梁たちが江戸時代以来の伝統を受け継いで建ててきた建物のことです．私は近代建築の調査や研究に携っているときから，伝統の構法と様式で建てられてきたこれら近代和風の建築が，日本の近代建築史の中でまったく無視され放置されていることが気になっていました．お上の指導する近代化の流れの中で，そんなものは大工に任せておけ，一日も早くレンガの建物を，鉄筋コンクリートのビルを，そして超高層をと，いうことで放り出されていたものだったのです．しかしそれを抜きにしては日本の近代建築史は半面を欠いたものになります．この空白をなんとかしなければ，と，いささかドン・キホーテ的な気持ちで立ち向かい始めたのです．近代建築のほうは私なりに目鼻がついた．若い方がたにお任せしてという気持ちもあります．

昭和56年度から文部省科学研究費を頂き，58年度からは鹿島学術研究財団の助成を得て，この近代和風の全国調査にとりかかっております．今までよりさらに一世代若い人たちを〝乗せて〟協力してもらっていますが，明治以来百余年間，空白のままで放置してきた分野だけに難行をきわめているというのが実情です．その理由を申し上げることは遠慮致しますが，口さがない若者は〝大閤秀吉の朝鮮征伐〟などと冷やかします．言い得て妙だな，と私自身もうっかり納得してしまいそうになりますが，もちろん決してそんなものではありません．じじつ，乗ってくれた若者たちの中には，それぞれ新しいテーマをそこに発見して成果を上げはじめている人も何人かはおります．

6．近代建築の保存・再利用

1）鍛えられる学問

日本の近代建築の調査研究は，必然的に近代建築の保存・保護，そして再利用の問題と結びつきます．それは研究者として必要な研究資料を守るという卑近な問題ではもちろんありません．やはり市民の一員として文化財を守り，都市の景観や環境を保護することであります．と同時にまた，専門家としてそれらの建物の評価を迫られるところがあります．絶えず自分の研究の方法論や史

観を問われるきびしいものでもあります．いわゆる専門バカが市民から，そして峻厳な社会経済条件によって叩き直される場でもあります．積極的にそれを受けとめれば，願ってもない学問の鍛練の機会でもあります．それを経過してはじめて，お願いや懇願から，堂々と胸を張っての主張に成長することができるのです．

近代建築調査の最初期の段階から，その主要なものの保存・再利用の課題がついてまわってきました．高度成長期と重なっておりましたし，スクラップ・アンド・ビルドが近代化日本の基本的姿勢として相変わらずあります．そして私や私たち自身においても多くの矛盾を抱えるところがありました．たとえば日本建築学会もかなりの名作であったもとの学会の会館を売却して別の土地に新しい会館を建てました．近代建築の保存を熱心にキャンペーンしてくれたある新聞社も，近代建築史上の傑作とされていたその本社ビルを処分してやはり別の土地に新社屋を設けました．この二つの旧建築のあったところには今，新しい百貨店がオープンして互いにしのぎを削っております．この生研の建物も永らく営繕委員長として守ってきましたが，やはり建て替えてもらいたくて今でも内心バタバタしております．たしかに難しい問題です．もちろん早急に解決するものではありません．ただこうした悩みの中から妥協とはまた違った学問の鍛えられ方が発見できると考えております．こうした問題においても，やわらかい視点が必要でしょう．

2）硬くなっていた学問

近代建築の保存と再利用，私の経験でも成功よりは失敗のほうがはるかに多くありました．しかし最近はずいぶん状況はよくなってきました．認識がたかまってきたこと，安定成長の時代に入ったことなども考えられます．とにかくこうした問題で，自分たちだけの〝正義〟を振りまわすことだけは私は強く拒否しております．〝正義〟ほど〝不正義〟とウラハラのあいまいなものはないと痛感しているからです．

この分野での仕事でもたくさんの思い出がありますが，とくに強い印象として残っていることを一つだけ紹介させて頂きます．これも結局は失敗したケースですが，都心部にあったある銀行の本店建築の保存運動で，せめてその外観だけでもと動いたことがあります．しかし現実には技術的にも法規的にも私たち建築史の研究者だけでは手に負えないことがわかって，話を建築学会に持ち込んで他の分野の専門家に協力を依頼しました．ところが驚いたことには（迂闊だったことにはと申すほうが正しいと思いますが），日本の建築の学問は，そしてそれを反映する学会の十有余の学術専門委員会の組織は，すべて新しく建てることを前提にしたものだったことに気付いたのです．それらはすべて横に配列されていて，ブルでならしたサラ地に建物を建てるためのきわめて硬い学問で，古いものの再利用などというやわらかい視点を持ち合わせていなかったのです．日本建築学会は来年創立百周年を迎えますが，日本の近代化のお上の歴史をそのまま反映して，大工さんたちの技術の中にたくさん蓄積されていた再利用のノウハウの，ノート一頁のストックもなかったのです．古くなったら建て替える．まったく単純で硬い近代化の実相を私たちは目の前に見る思いがしました．そして文字通り自分の迂闊さを反省したのです．さきの，近代和風の調査研究を志した動機の一つもここにありました．

幸いこの問題を契機にして文化庁内に近代建築の保存再利用に関する懇談会が設置され，建築の多くの分野の専門家を，いわばタテに組織して専門の枠を越えて検討するようになったのは一つの進歩だと喜んでおります．しかし今のところは官公庁・自治体の古い建物だけを対象にしており，残念なことですが，一つの拠点ができたことは高く評価すべきでしょう．

7．建築の評論

1）「設計施工を推す」

私は建築評論の仕事もしてまいりました．これは学生時代からお世話になった浜口隆一先生の直接の影響とも思いますが，戦後の混乱時代にみんなでワイワイやっていた先輩・同僚の力も大きかったと思われます．もちろん書くことが嫌いでは話になりませんので，私自身にもその気があったことも事実です．

地味な研究者と評論，つねづね多少気になっておりますが，生産技術史や近代建築史研究の応用形として私は私なりに割りきってきたところもあります．ことに近代を問題にする以上，評論を通じて自分の史観とか考え方を常に世間に披露して正してもらうこともまた必要ではないかと今でも考えております．しかしその反面，常に内部にチャージすることを怠ってはならないと思います．たんなる口舌の徒に堕するからで，これは私にとっても十分に自戒すべき点だと心得ております．その点，私自身がどちらかと言うと難しい哲学的な思索を必要とするものよりは，ルポルタージュ的なものを得意とすると言うか，とにかく好む傾向があります．言い換えれば現場マンでしょう．事実に即さないと自信をもって物が言えないところがあります．

そのルポルタージュで思い出がとくに鮮明なものに日本の建築設計組織のルポがあります．これは浜口先生と分担して昭和36年から37年にかけて行ったもので，その最後に「設計施工を推す」というずいぶん思い切った主張をしました．これは総合建設業者の設計部がこれからの日本の建築設計をリードして行くだろうという予測を述べたもので，建築界ではかなりの反響がありました．お前の論文のおかげで，優秀な学生がみんな請負いの設

計部へ行ってしまうと先輩の建築家から文句を言われたこともたびたびあります．また今もって建設会社の設計部の方から，先生のあの論文を読んで私はここに来たのですと言われることもあります．そんなときには，私はただ頭をかくだけです．

たしかに設計施工を一貫してやるというのは日本の建築界の特殊な現象かも知れませんが，造船でも自動車でも他の工業ではそれが当然ではないか，建築がますます大規模化し機能が複雑化してきたら，設計と施工が一貫して行われるほうがどう考えても有利だ，といった技術史的判断も私にはありました．しかし今，ここで初めて卒直なところを申しますと，建設業の設計部の人びとが，建築家として人並みに扱われていないというルポを通じて知り得た事実に対する義憤があったのです．硬直化した考えに対する私なりの抵抗でもありました．私は静岡県の清水港の生まれで，親は遠州森町の出，いささかおっちょこちょいのところがあります．それはともかく，この世間をおさわがせした予測は，半分当って半分外れたというところでしょうか．しかし間違いではなかったようです．

2）　虚構の崩壊

昭和39年1月から翌40年6月まで，17回にわたって私は「日本建築家山脈」という総タイトルの論文を雑誌『新建築』に連載しました．これは人とその人脈を通して日本の近代建築史を叙述したものですが，多くの生存者にお目にかかった聞き書きによるところが大きかったので，逆に建築史研究の資料集めにもなりました．関野克先生の例のアンパンと牛乳の古事記を，少しは民衆のものへ拡大しようという意図がありましたが，せいぜい「日本書紀」くらいにはなったでしょうか．

昭和49年10月に私は「再検　日本近代建築史ノオト」という評論を書きました．これは『新建築』誌創業50周年記念に出版された「日本近代建築史再考―虚構の崩壊―」という臨時増刊号に掲載されたものです．この臨時増刊は近江栄（日大）・山口廣（日大）・長谷川堯・鈴木博之（東大）の諸先生をはじめ若手の人たちと共同し1年前から研究を始めてまとめたもので，幸いに大評判となり単行書として増刊されて洛陽の紙価を高めることになりました．

これは日本の近代建築史が，従来その近代主義建築理念をもって語られ，それがあたかも建築における〝正義〟のごとき主張を伴っていたことに反撃したもので，その蔭にかくされ，無視されてきた建築や建築家たちの再評価を訴えたものでした．すなわち近代主義建築の構築してきた進歩の概念を「虚構」と見てそれを突き崩す作業をしたのです．共同者の皆さんの明治建築の調査研究開始以来の永い地味な研究の成果と見ることもできます．

多少オーバーな申しようをさせていただけば，日本の建築思想はこの時点においてやっと近代化・西欧化の〝主義〟と決別できたと考えます．言い換えればやわらかくなったのです．そして日本のポスト・モダニズムがこの時点から生まれたとも思っております．

8.　大工道具の歴史

1）　道具と人のまんだら世界

日本の大工道具，（それは木工具と称してもよろしいのですが）は日本の道具の中の王者です．木造建築の永く，しかも素晴らしい成果を生んできた伝統は申すまでもなく，日本の木の文化全体を支えてきたものです．私は材木屋の伜で，建築史の研究をしてきましたので，当然のことながら日本の大工道具に早くから興味を抱いておりました．工作好きということもありましょう．

そんなことで大工道具の歴史の研究を始めましたが，その最初は，この講演の始めにお話ししました明治工学史の研究に，ささやかでしたが調査費が出たのです．それを使って兵庫県の三木に出張し現代における大工道具の生産事情を調査したのが始めでした．三木というところは古くから大工道具の産地として聞えた町で，そこに江戸時代半ばごろから続いている黒田さんという金物問屋さんがありました．そこの御隠居さんがじつに親切に指導して下さったのです．大工道具の鍛冶屋さんにも何人か引き合わせて下さいました．それをきっかけにして全国の道具産地を歩き，大工さんや鍛冶屋さんを訪ねたのです．砥石の山にも入りました．

途中で明治建築の調査のために中断することもありましたが，昭和48年8月に岩波新書の『大工道具の歴史』を出版するに至りました．これはお蔭で当時のベストセラーになり，毎日出版文化賞も頂きましたが，これが契機となりまして昭和50年1月から59年3月まで足かけ10年，470回の「道具曼陀羅」の連載を始めました．これは毎日新聞社の週刊グラフ雑誌の『毎日グラフ』に掲載したものですが，建築写真家の岡本茂男さんがじつにすばらしい道具の写真を撮って下さいまして，それに私が解説を加えるという二人三脚でした．

2）　私の〝モノ学〟

それに登場した道具は大工道具を主としましたが，それ以外の職人さんの道具も扱いましたので，大工さんや鍛冶屋さんを始め，ほとんどあらゆる職人さんと取材を通じて仲良しになれたのはたいへんな幸せだと感謝しております．もしこういう仕事がなかったら，このまったく別な，すばらしい世界を垣間見ることもなかっただろうと思います．私の人生を豊かにしてもらったのです．職人仕事の再評価の気運もだんだんにたかまって来まして，昭和59年7月には神戸に「竹中大工道具館」も開館し，筑波の科学万博の政府展示館の歴史館には，「竹中大工道具館」所蔵の600点にもおよぶ大工道具が展示され

るほどになりました．

この「道具曼陀羅」の取材を通じて私は，職人さんたちが，経験的ではありますが，じつに徹底してモノの本性，物性を究めそれを利用してじつにやわらかく作っていることに深い感動を受けました．それに比べて今日の建築家はあまりにもモノを知らなすぎる．切ったことも叩いたこともない，ひどいときは手にしたこともない新建材を，ただカタログを相手に使用して人を衝つすぐれた建築ができるわけがない，ということで大学院の講義に私なりの〝モノ学〟をとり込んだのもそのためです．学生諸君は，ああまた先生の〝単純学〟（モノ学，monology）かとニヤニヤしたでしょうが（これは私のヒガミかも知れません），私はレビ・ストローズの『野性の思考』を引用したり，東山時代の文化史を例にとったりして，できるだけ学問らしい形にしようと，これでも苦労したのです．

9．やわらかいものへの視点

1）やわらかく作る人びと

さて，最後になってやっと本題に入るわけですが，私は最近，しきりに「やわらかいものへの視点」ということを考えております．こうした考えに至った直接の契機はいま申し上げました職人さんの手仕事を拝見して彼らがじつによくモノの本性を究め，そしてそれに合わせて，その本性・物性を巧みに利用して作っていることに感動したことです．無理して規格化し画一化・均質化しないと工業生産の軌道に乗せることができない，といういわば硬い造り方に対して，彼らはじつにやわらかく作っているということであります．だからこそ近代化の論理からすれば，均質化できない木材など工業生産の対象にならない，やわらかい作り方の職人仕事などは遅れたものとして放置するということにもなったのではないかと思ったのです．そうして，こうした硬くなることの近代化は，たんに生産の場だけではない，政治とか社会のいろいろの制度の中にも管理の思想の強化として見られるのではないか．大学もまた，しかりとも言える，と私は思うようになったのです．こう申してまいりますと，明治建築や近代建築の調査と研究，そしてその保存・再利用の難しさ，あるいは近代和風の研究の必要性，学会の研究組織のことなど，私が今まで私なりの研究史としてお話し申し上げてきたことのすべてが，硬いものとやわらかいものとの対立・相剋，そして硬くなることの近代化の勝利の歴史だったとして理解していただけるのではないかと思います．

2）この視点の回復を

硬くなることによる近代化は，たしかに私たちに多くの利便を提供してくれました．しかしその反面ではたとえば大工さんがいろいろな性質の木の，その違いをまさに適材適所に応用し，個性の違いをむしろ楽しんで造るといったことを否定してきました．もしこれからの私たちの進歩の目標が，もっと個性があり，多様化が許され，それを楽しむことの豊かさにあるとしたら，これまでの近代化の過程で無視し退けてきたやわらかいものへの視点の回復こそが急務でしょう．それは，たんなる懐古趣味でも，飽食のあげくの気晴らしでもありません．もっと積極的な，ほんとうの豊かさへ向けての新しい目標設定であります．

私は今日の工学研究の最先端は，やわらかいものへの視点を回復しつつあるように思います．均質化し，標準化して硬くなることは，資本の論理を別とすれば，がんらい近代の工学や技術の本意ではなかったはずです．しかし従来の処理能力では文字通り千差万別のやわらかいモノや情報の処理は不可能だった．だから止むを得ず均質化し規格化して硬くせざるを得なかったと思うのです．

一言で申しますと，コンピュータの発達が，そのやわらかいものの処理を徐々にではありますが可能にしつつあります．生研における諸先生のお仕事のように，最先端の工学は，いまその間口を拡げつつあります．私の退官記念講演の演題を，やや突飛かなと思いつつも「やわらかいものへの視点」とさせて頂いたのも，そのような私なりの認識があったからです．どうかご元気で，ますますやわらかくなって下さることを心から願っております．

10．おわりに

私もあと数日で東大を停年退官いたします．まことに感無量ですが，ある意味ではちょうどよい時期だと思います．これはやせ我慢ではありません．やはりこの年になりますと，手枷足枷と言いますか委員会とか何とかいろいろの雑用が身のまわりにいっぱいついてまいります．それは私どもの年代の負うべき仕事で，いちがいに否定すべきものではありませんが，とにかく研究者としては半身不随になるところがあります．それを停年退官でいっぺんにと言うわけにはいきませんが若返えらせて頂くというのはたいへん有難いことであります．タイミングもまことによいと思います．

4月からは法政大学工学部建築学科にまいります．『論語』為政編の「学びて思わざれば　則ち暗く，思いて学ばざれば　則ちあやうし」を自戒の言葉として心を新たにやって行こうと決心しておりますので，これからもどうぞよろしくお願いいたします．おそらく，私の人生の半ばを占めたであろう東大生研の発展と，皆さま方の御健勝を心から祈念するものであります．

とりとめのない話をご静聴下さって，ありがとうございました．

（1985年7月26日受理）